公開パネル・セッション

交通・交易史の新展開と中央アジア地域研究

秋山　徹

大学の講義や社会人を相手とした公開講座などで中央アジアのことを話していて印象的なことがある。講義の導入として、この地域の呼称やその由来から入るのだが、「中央アジア」や「中央ユーラシア」と言ってもピンと来ない。だが、「シルクロード」と言った途端、聴衆の目の色は変わる。もちろん、あくまで私個人の印象にすぎないのかもしれないが、「シルクロード」の知名度と好感度が高いことは確かであろう。他方で、研究者はむしろこの地域の「シルクロード」イメージをいかに払拭するか、という点に力を傾けてきたと言っても過言ではない。すなわち、この地域の人々の視点にたち、彼らが残した史資料（現地史資料）を用いて、この地域の内在的論理を析出すること――ソ連邦解体後から現在に至る四半世紀のなかで展開してきた中央アジア地域研究の要はまさにそこにあり、その成果も着実に蓄積されてきた。そして、言うまでもなく、日本中央アジア学会も、そうした研究成果を共有する場として重要な役割を果たしてきた。

しかし、中央アジアに限ったことではないが、昨今、地域研究は大きな試練に立たされている。もはや対象とする地域に肉薄し、その内在的論理を析出してさえいればよい時代は過ぎ去った。こうした状況への対応は、すでに様々なかたちで試みられている。一例を挙げれば、本学会の宇山智彦会員が代表をつとめる科研費プロジェクト「比較植民地史：近代帝国の周縁地域・植民地統治と相互認識の比較研究」は、文字通り地域間比較という手法によるこうした状況への対応のひとつのあり方としての側面をもつものであろう。比較史のほかに何か有効な手法はないだろうか――このように考えるとき、魅力的に映るのがシルクロードというコンセプトである。シルクロードというコンセプトがもつグローバル性と、中央アジア地域研究のもとで析出された地域の内在的論理を有機的に接合することに新たな可能性を見出すことができるのではないか。

本パネル・セッション「交通・交易史の新展開と中央アジア地域研究」は、こうした着想のもとに企画された。交通・交易史それ自体は決して昨今に始まったものではなく、我が国において古い歴史がある。だが、昨今、交通・交易史をめぐる新しい研究が展開し、その成

果が出されるようになってきた。すなわち、それらは、豊富な現地史資料の利用とその読解から析出される中央アジアの内在的論理を踏まえたかたちでの交通・交易史であるという点に新しさと大きな可能性がある。そこで、本セッションではそうした研究に第一線で携わる気鋭の研究者 5 名に報告者ならびにコメンテーターとしてご登壇いただいた。報告の詳細に関しては、各報告要旨をご覧いただきたい。もちろん、中央アジア地域研究で蓄積された成果をグローバルなかたちで展開させることには多くの課題があり、言うは易く為すは難しであり、本セッションだけをもってしてその結論が出るものではない。とはいえ、本セッションを通して、「陸のグローバル・ヒストリー」の構築に向けたヒントが少しでも得られれば、企画者として望外の喜びである。

（早稲田大学イスラーム地域研究機構）